

レジャープールの男子 更衣室にて～こんなに 大きい女の子いて良い の？～

夏休みも中盤を過ぎたある晴れた日曜日。5年生の健太、和也、真一の仲良し3人組は、ずっと楽しみにしていた某有名テーマパークのプール施設へ行くことにした。朝8時半に近所の駅で集合し、大きなリュックを背負って電車に乗り込んだ瞬間から、3人の興奮は最高潮だった。

「マジで今日楽しみだな！」

「新しくできたあのデカイスライダー乗りたいんだよな〜！」

「流れるプールもあるらしいよ。波の高さもめちゃくちゃ高いらしい！」

3人は今日という日をととても楽しみにしていて、おしゃべりしていたらあっという間にテーマパークの最寄り駅に着いた。

テーマパークの最寄り駅に着くと、すでに多くの家族連れやグループがいた。ゲートをくぐり、入園したらプールエリアへの案内看板が見える。夏の強い日差しと、遠くから聞こえる歓声や水しぶきの音が3人をさらに高揚させた。

3人は並んで歩きながら、途中の売店で冷たいジュースを買って飲んだ。猛暑日に飲む炭酸飲料は渴いた体に染

み渡る。プールの入口が見えてくると、自然と足が速くなる。

「ロッカー混んでなかったらいいけどな」

「荷物は絶対無くすなよ」

そんな会話を繰り返しながら、男子更衣室の入口に到着した。

自動ドアをくぐると、冷房の効いたひんやりとした空気が心地よく肌を包む。中は思ったより広くて、ロッカーがずらりと並んでいた。

「ここいいじゃん。奥の方にしよう」

健太が先頭に立って歩き、3人は並んだロッカーを3つ確保した。

リュックを下ろし、Tシャツの裾に手をかけたその時——突然、視界の端に

信じられないものが飛び込んできた。同じくらいの年の女の子が、一人でロッカーの前に立っている。黒髪をポニーテールにまとめ、可愛らしい顔立ち。明らかに女の子なのに、ここは男子更衣室だ。

3人は一瞬、動きを止めた。健太が小声で隣の二人を突つく。

「……やばい。女子がいるぞ……」

和也と真一も目を見開き、固まった。

女の子は少し不安げに周りを見回していたが、お父さんらしき男性が「先トイレ行ってるね」と言い残して出て行ったばかりのようだった。女の子は一人で着替えを始めることにしたらしい。

まず、女の子は明るい色のTシャツをゆっくりと頭から脱ぎ始めた。白い肩と

細い腕が露わになる。脇腹の滑らかなライン、背中から腰にかけての曲線がはっきり見えた。下に着ていたのは灰色のスボブラ。ふっくらと膨らんだ胸の谷間が、布地に優しく包まれている。ブラの上からでもその柔らかさと重みが想像できた。

3人はロッカーの前で完全に動きを止めた。

健太はTシャツを半分だけ捲ったまま、息を飲む。和也はシャツのボタンに指をかけた姿勢で硬直し、真一はリュックに手を置いたまま、目だけを女の子に向けていた。更衣室の空気が、急に張りつめたように感じられた。

女の子は次にスカートのファスナーを下ろした。ジーツという小さな音が静かな空間に響く。スカートがするりと足元

に落ち、細くも柔らかい太ももが現れた。白いシンプルなパンツが、おしりを優しく覆っている。女の子は下着姿になると、少しだけ姿勢を正して深呼吸をした。その動きで、ブラジャーに包まれた胸が軽く上下し、3人の視線を強く引き寄せた。

「……………」

誰も何も言わない。ただ、3人の視線だけが女の子に集中していた。

女の子は背中に手を回し、ゆっくりとブラジャーを前へずらしていく——。ぷるん、と柔らかく白い胸が、弾むように完全に露わになった。大きめの淡いピンク色の乳首も丸見えだ。明らかに女の子だとわかるその膨らみに、3人は息を止めた。

